

木村定三コレクション漆工芸品目録

(作品解説)

鶴見大学 小 池 富 雄

宇都宮大学 松 島 さくら子

京都国立博物館 久 保 智 康
(名誉研究員)

ほか (p. 93凡例参照)

日本



1 黒漆尻張棗

江戸 (17世紀)

径6.1 高6.1

M1421 (志りふくら棗)

尻張棗ともよぶ、中型棗で裾が張った姿である。利休形十二器の一つ。蓋裏に表千家六代覚々斎原叟の朱漆花押がある。(カラー口絵 p. 1 参照)
(小池)





2 黒漆棗 庸軒好 宗哲作

くろうるしなづめ ようけんこのみ そうてつ

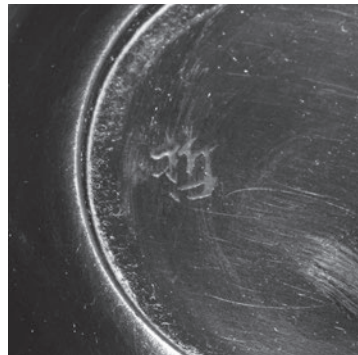
江戸（17～18世紀）

径6.5 高6.6

附属：縹地一重蔓菊牡丹唐草文仕覆

M1420（黒 庸軒好 望月棗）

初代中村宗哲（1617-1695）が藤村庸軒の好みに応じて様々な漆塗り棗を製作したという。十五夜にちなんだ作った小棗15個を望月と命名して、その後の手本となった。本作も中村宗哲作とする高台内文字、箱書、極め書がある。蓋裏「望月」漆書、底部高台内に「哲」漆書。内箱蓋裏「望月棗 中村宗哲作／庸軒好（花押）」。外箱側面「一香／庸軒好／望月棗／庸軒共箱／袋舟越漢東／□箱／愈好」箱の身の底部隅には「塗師 宗哲」の墨書があり、箱書の書を藤村庸軒とする古筆了意の鑑定小札も附属する。（カラー口絵 p. 1 および p. 94 参照）（小池）





3 黒漆獅子懸守時絵棗

くろうるしししかけまもりときえなづめ

江戸前期（17世紀）

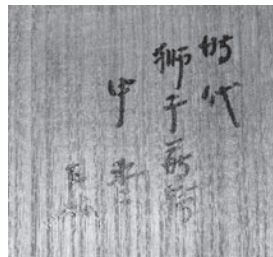
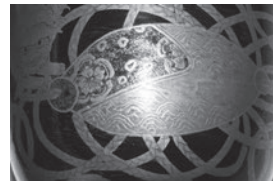
径6.7 高6.9

M1424（獅子時絵棗 宝袋房紐絵）

宝珠に戯れる玉取獅子は、東洋の伝統的な図像であり、この棗では宝珠ではなく房を付けた長い組紐を付けた懸守に代わっている。金平時絵で煩雑に絡む組紐や唐獅子を描き、針描を多用する技法と幾分稚拙な図様は、江戸時代前期の作風とみられる。後世の修復や塗り重ねが多く、金の発色も鈍く、均一でない。当初の状態から改変されているとみられる。箱蓋裏には表千家十三代即中斎宗左（1979没）とみられる「時代獅子時絵 中棗 左（花押）」の墨書がある。

参考文献：池田巖『嵯峨棗』平成15年。同書の図版番号56懸守獅子時絵中棗が類似する。

（小池）





4 黒漆柳枝垂桜時絵棗

江戸前期 (17世紀)

径7.8 高7.6

M1426 (しだれ桜嵯峨棗)

丸棗に分類される姿の肩や腰が球形に近い姿である。芽吹柳と枝垂れ桜の幹が側面から伸びて、枝が蓋の上から裾近くまで垂れ下がっている図様配置である。円形の蓋ながら、文様が一致するのは一か所だけである。金の平蒔絵で文様をあらわし、葉脈の細部には針描が多用されており、近世初頭－江戸時代初期に流行した技法意匠である。嵯峨棗とは、無名塗師による量産品の粗製塗り棗に、桜、柳や小袖の意匠などを施す。真偽未詳ながら、嵯峨嵐山で行楽客向けに土産物として販売されたことが名称の由来となったという。戦後になってから侘びた趣が愛好されるようになり、名称ももてはやされるに至った。(カラー口絵 p. 2 参照) (小池)





6 黒漆小棗 宗旦好

江戸（17～18世紀）

径5.3 高4.5

附属：白地間道

縹地二重蔓菊桔梗唐

草文綴子

M1438（宗旦棗〔小棗〕）

総体黒漆塗りの木胎小棗。堅木取りによるろくろ挽き成形である。胴から底部にかけてすばまり、全体を黒漆で数回塗り直したと見られる。棗の蓋裏中央には、表千家六代覚々斎（1678-1730）が入れたとする朱漆の「旦（覚々斎花押）」があり、宗旦作と極められている。また、内箱蓋裏に如心斎宗左（表千家七代、1705-1751）が、棗の蓋裏の文字と花押は覚々斎宗左と極めている墨書がある。

仕覆、桐棧蓋造の外箱と内箱および文書が附属する。

（カラー口絵 p. 2 および pp. 95-96参照）

（野口）



棗蓋裏「旦（覚々斎花押）」



付属の仕覆

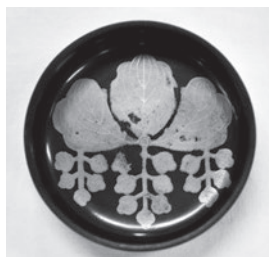


5 黒漆桐桜蒔絵棗

江戸前期（17世紀）

径6.0 高7.6

M1425（桐桜文嵯峨棗）



蓋裏



7 黒漆紫陽花蝶蒔絵棗

江戸（18～19世紀）

径6.8 高6.9

M1423（時代八幡花棗）

箱の身側面の墨書には「時代八幡（仙）花蒔絵」とある。金平蒔絵で紫陽花（八仙花）に蝶をあらわす。（p. 96参照）（小池）



8 黒漆藤蒔絵寸切形棗

江戸（18～19世紀）

径6.8 高8.2

M1427（金林寺 嵯峨棗）

円筒形、置蓋造りの茶器を寸切形とも呼ぶ。現在では、蓋の直径がわずかに身直径よりも大きい作を金輪寺形茶器と区別している。この棗の蓋の裏には複弁の菊紋が金蒔絵で大きくあらわされており、蓋の棧小口も金地で仕上げて丁寧である。反対に外側の藤の花や枝は大きく磨減しており、金蒔絵の下に朱漆を用いていたのが明瞭である。大粒な金粉を使用しており、近世初期の別の容器を茶の湯道具に転用したのかもしれない。（小池）



9 くろうるしもつこうもんちらしやつはしまきこ
黒漆木瓜紋散八橋蒔絵
こすみあかてばこ
小角赤手箱

江戸（17～18世紀）

幅19.3 奥行17.4 高13.1

M1529（時代蒔絵菖蒲絵
茶箱）

被せ蓋造りの長方形小箱で、蓋と身の角と口縁に朱漆を塗った布目を見せるこのような形式を角赤（隅赤）、角赤手箱と呼び、大小さまざまな寸法がある。身の左右には金銅製の紐金具がつく。大名婚礼調度では、大隅赤手箱、小隅赤手箱の対が定型化して揃えられる。この隅赤はさらに小さな寸法である。蓋表には水辺に杜若、側面には蓋と身に石畳文を施し、木瓜紋を不規則に散らす。杜若に水流の意匠は、『伊勢物語』八橋にちなむ古典文学意匠。黒漆地に金の平蒔絵を主に一部に絵梨子地を施す。総体に保存状態が悪く、汚損と剥落、亀裂が進んでいる。（カラー口絵 p. 3 参照）（小池）



紐金具

紐金具は金銅製で、裏菊を意匠として打ち出す。花卉の表面は穏やかな肉取りで、桃山時代とみてよさそうである。ただし、鑲台との間に挟む座金は彫金がやや劣り、後補の可能性も残る。（久保）



10 えびすずしゅうるしきくちようこうごう 恵比須図朱漆木彫香合（鎌倉彫）

桃山～江戸前期（16～17世紀）

径7.7～7.8 高4.7

M1493（鎌倉彫海老須図香合）

木彫漆塗りで蓋の表には、左脇に魚を抱えた恵比須が表されている。頭には頭巾をかぶり、まっすぐに伸ばした右手には釣り竿が握られている。蓋と身はそれぞれ一材から轆轤挽きで成形されたとみられる。黒漆を塗って、その後に朱漆を塗ったのであろうが、朱漆の剥落が甚だしく、黒地の面積のほうが多く見える。内部、底部は黒漆塗り。（小池）



11 なしじののみやまきえこうごう 梨子地野々宮蒔絵香合

江戸前期（17世紀）

幅6.3 奥行7.2 高3.8

M1125（錫縁香合 野々宮蒔絵）

蓋の表に垣根と鳥居があらわされて、源氏物語の野々宮帖を暗示している。蓋裏には梅花が三輪、薄肉の高蒔絵であらわされる。合口に錫（ないし鉛合金）の置口を廻らした正方形の小箱で、もともとは手箱の内容品の小箱の一種である菌黒箱を茶の湯の香合に転用した錫縁香合と呼ばれる。江戸時代前期には流行したので、室町時代風の擬古作の錫縁香合が作られた。梨子地、高蒔絵は図様と合わせて室町時代の上品な公家趣味を継承している。（カラー口絵 p. 3 参照）（小池）



12 くろうるししずかもじらでんこうごう 黒漆静文字螺鈿香合

江戸（17～18世紀）

径8.4 高4.1

M1491（静文字 小太鼓香合）

木胎轆轤挽きの刳物。底部は碁笥底。総体黒漆塗りに草書体の静の螺鈿文字を蓋の表にはめる。貝の種類はアワビで、研ぎ出しが剥ぎ出しかは不明で粗末な木胎を含めて輸入品の可能性もある。更紗の御物袋が附属する。（小池）



13 牡丹文堆朱模香合

江戸前期 (17世紀)

径11.4 高3.7

M1396 (鎌倉彫香合)

鎌倉彫風の香合。蓋は印籠蓋造。黒漆地に文様部分を朱漆とし、内部と底部を黒漆塗りとする。蓋上面に牡丹文を表し、地の空間を広くとる。側面は蓋と身を合わせ七宝文繋ぎを基にした三角の連続文を廻らす。文様の彫りは、太線と細線の使い分けが見られる。文様は、胎の上に下地を厚く盛り上げ、彫刻を施した後、朱漆を塗布していることが文様部分の断層や朱漆層の剥落部分より分かる。(渡邊報告書 pp. 106-107 参照)

(大多和)



14 兜巾形朱漆香合^{とぎんがたしゅうりしこうごう}

江戸（17～18世紀）

径5.8 高4.1

M1504（無地金馬兜巾香合）

箱書には「無地キムマ 兜巾香合」とあり、古くは東南アジア製の無地蒟醬技法と鑑定されたのであろう。稜線のある山形の蓋と、碁笥底風の底部の姿は、日本の伝統的な香合の造形からは外れている。内部、底部は緩やかに波打っており、紙胎かと思われるほどである。目視の限りでは、黒漆塗り、その上に重ねた朱漆は堅実で異国趣味を備えた和製ととらえておく。

（小池）



15 内朱外黒漆六弁花形盆^{うちしゅそとくろりしろくべんがたぼん}

桃山～江戸（16～17世紀）

径20.0 底径15.5 高5.0

M1467（根来さくら形菓子器）

六弁花型の口縁に高い高台をそなえている。姿は中国漆器から学んだとみられるが見込みの朱漆、高台の内外の黒漆も光沢がある日本産の塗りで、高台内には朱漆の文字で「吉水 十 五」とある。塗肌を子細に見ると、度々塗り直されたのが窺える。器胎は、更に古い可能性がある。吉野の吉水寺の什物とされる。同寺は明治の神仏分離後は吉水神社となった。箱書には「さくら形 菓子器」とあるが桜花の五弁ではなく、近代の茶の湯趣味からの箱書であろう。

（小池）





くろうるしまるのうちはないりまっこうもん
 16 黒漆丸ノ内花入亀甲紋
 まきえおしき
 蒔絵折敷

江戸 (17~18世紀)

幅13.9 奥行13.7 高1.9

M1387 (時代 丸紋蒔絵四方盆)

丸の内に花菱亀甲紋を三つ、三ツ盛りに表す。
 四隅を切り落とした角切り折敷の形状で、低い
 縁の立ち上がりにも同じ紋が配されている。
 (カラー口絵 p. 4 参照) (小池)





17 うちしゆそとせいうるしいりすみよほうぼん
内朱外青漆入角四方盆

江戸（17～18世紀）
幅19.4 奥行19.2 高2.3
M1382（若狭盆）



18 しゅうるしよほうぼん
朱漆四方盆

江戸（17～18世紀）
幅19.7 奥行19.7 高2.0
M1389（唐物朱四方盆）



19 うちしゆそとくろうるしあしつきよほうぼん
内朱外黒漆脚付四方盆

江戸（17～18世紀）
幅26.5 奥行25.4 高4.8
M1381（時代 根来香盆）

正方形の浅い盆を一材から刳りだして、裏に二本の低い板状の足も刳り出した素朴な造形である。奈良・法華寺伝来の同形の磨滅がはなはだしい朱漆盆を、羅漢盆と呼んでいる。底部・足は黒漆塗り。箱側縁の貼札に「寿福寺」（鎌倉）旧蔵とある。（小池）



20 うちしゅそとくろうるしあしつきぼん たぐからぼん
内朱外黒漆脚附盆 (手力盆)

江戸 (18~19世紀)
幅37.9 奥行28.3 高5.4
M1379 (春日盆)

裏面に二本の板足を付けた、見込みが朱漆塗り、総体は黒漆塗りの盆で、奈良の興福寺の所蔵品にちなんで春日盆、手力盆と呼ばれる姿である。実際に同じ寺で使用した品が、新品と入れ替えられ、市中に出回った品もあり、また同形の模造作もある。(カラー口絵 p. 4 参照)

(小池)



21 うちしゅそとくろうるしあしつきぼん たぐからぼん
内朱外黒漆脚附盆 (手力盆)

江戸 (18~19世紀)
幅40.8 奥行32.8 高4.3
M1380 (春日盆)



22 くろうるしたけぶちぼん
黒漆竹縁盆

江戸後期~明治 (19世紀)
幅24.2 奥行24.4 高2.4
M1383 (唐物四方面取竹菓子盆)



23 竹縁四方盆

江戸後期～明治（19世紀）
 幅19.3 奥行19.0 高1.9
 M1388（唐物竹錫縁四方盆）



24 外黒内朱漆長盆

江戸後期（19世紀）
 幅68.2 奥行10.6 高2.0
 M2326（時代 超長盆 [根来風]）



25 くろうるしかすがじょく 黒漆春日卓

江戸（17～18世紀）

幅56.4 奥行41.8 高40.6

M624（春日卓〔四脚〕）

総体木胎黒漆塗り、八双・隅金具は金銅製。
持ち送り部分に朱漆塗り。（カラー口絵 p. 6 参
照）（小池）



26 くろしつしやすびじょく 黒漆春日卓

江戸（17～18世紀）
幅65.1 奥行35.4 高29.3
M636（春日西之舎卓）



27 くろしつはなもんらでんはっしゅく 黒漆花文螺鈿八足卓

江戸（17～18世紀）
幅92.6 奥行43.8 高43.0
M625（青貝春日卓 [八足卓]）

八足卓、天板は朱漆塗り、裏面、足は黒漆塗りで左右の足の底部に畳擦板を付ける。天板側面および足部分に、アワビの研ぎ出し螺鈿による花菱文を施す。金銅製魚々子地牡丹唐草文の角金具、八双金具を付ける。（小池）



28 黒漆八足卓

江戸（18～19世紀）
幅49.9 奥行31.4 高27.1
M635（唐卓）



29 木地文机

江戸（17～18世紀）
幅92.1 奥行36.0 高25.9
M632（机）

桑材とみられる木地が主体の文机。天板左右に筆返しがつく。左右の脚に透かし彫りで菱形四弁花。天板側面、脚、透かしの小口に金沃懸地をほどこして、細部の仕上げは丁寧である。
（小池）



30 朱漆唐草蝶鳥文蒔絵経机

江戸（17～18世紀）
幅91.7 奥行48.1 高36.4
M626（五斗朱台〔古代唐草蒔絵五斗台〕）



31 くろうるしおもだかもんちらししょうくつる
黒漆澤瀉紋散松竹鶴
まきえみづくえ
蒔絵文机

江戸（17～18世紀）

幅88.5 奥行37.5 高26.5

M633（金蒔絵松竹群鶴机）

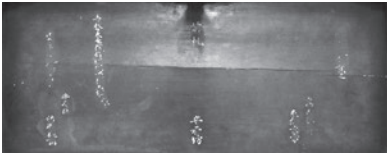
机の天板部分の文様は、ほとんど磨滅しているが、筆返の文様は花七宝文繫地に澤瀉紋が左右三つずつ残り、脚の部分の金蒔絵も良く残っている。松、鶴、亀、などの吉祥意匠を表しており、大名婚礼調度の文机である。（小池）



筆返



脚



32 黒漆脇卓

江戸（17世紀）

幅76.5 奥行33.9 高42.4

M627（卓〔前机〕）

総体黒漆、金銅製金具を所々に打つ。天板の裏面に「前机 安居坊」「延寶五年（不明）」等の朱漆文字がある。粗野な手口で抹消されており、除籍して払い出した際に所有者や由緒を匆々に消したのであろう。

（小池）

八双金具

天板と框の四角と長側に出八双金具を打つ。やや赤みが強い銅製鍛造で、文様をあらわさないため年代は絞り込み難い。天板裏面の朱漆銘、延宝五年を製作年代の下限とみても差し支えないであろう。

（久保）



33 黒漆長方卓

江戸（18～19世紀）

幅75.7 奥行26.2 高18.7

M630（黒塗長方卓）



34 朱漆薬器

室町（16世紀）

口径11.1 底径6.3 高7.7

M1468（根来蓋付菓子器）

いわゆる根来の薬器。総体、高台内も含めて朱漆塗りで、朱漆の下から黒漆の塗りがのぞいている。内部は黒漆塗り。蓋表に「根来菓子器」と熊谷守一が箱書をしている。（カラー口絵 p. 5 参照）（小池）



35 朱漆薬器

江戸（18～19世紀）

身径5.7 底径3.6 高5.4

M1415（根来茶入）

茶器ではなく薬器を見立てて茶道具にしている。木体、轆轤挽きの刳物、黒漆の上に朱漆塗り。総体外部が朱漆、内・底部が黒漆塗り。箱蓋裏に「茶器／守一（花押）」と熊谷守一が箱書をしている。（小池）



箱蓋裏



箱蓋表



36 しゅうるしりんがたきんだい 朱漆輪花形盞台

江戸（17～18世紀）
 鐳径17.1 高台径7.1 高4.0
 M1136（根来塗天目台）

六弁花形の盃の台。このような低い姿の盃の台も、中国・朝鮮の陶磁器、金工にも類例があるが、本作は通常の天目台の酸漿部を切り取って、改造され、塗り直された可能性がある。
 （小池）



37 しゅうるしてつまおけ 朱漆手付桶

江戸（18～19世紀）
 口径17.7 底径15.7
 総高（取手含）13.5 身高5.2
 M1384（タイ朱塗手附盆）

浅い鉢形の姿で口縁と裾回りにかすかな玉縁を廻らす。金属製の釣り手を口縁に渡す。箱書には「タイ」とあり、器胎は東南アジア製の可能性もある。
 （小池）



38 しゅうるしりすみおしき 朱漆入角折敷 5枚

江戸（17～18世紀）
幅28.5 奥行28.5 高2.3
M1484（根来善）

五枚組の朱漆塗り角切り折敷。角切りの四辺が比較的小さく江戸時代前期の古様である。底部は黒漆塗りで、すべてに「（判読不明）の内」の朱漆書きがある。（カラー口絵 p. 5 参照）

（小池）



39 ふちしゅうちためすみきりおしき 縁朱内溜角切折敷 5枚

江戸（19世紀）
各 幅28.4 奥行28.2 高2.7
M1687（根来膳 五人揃）



40 しゅうるしばい 朱漆盃 5枚

江戸（19世紀）
径8.6 高2.6
M2288（根来盃 5客）





41 とんぼくものすずきえ
蜻蛉蜘蛛巣図蒔絵

おおつみどう
大鼓胴

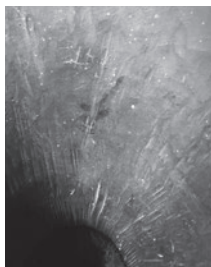
江戸（17～18世紀）

口径11.3 高27.0

M1250（蜻蛉蜘蛛巣図蒔
絵大鼓胴）

総体黒漆塗りの木胎大鼓胴。上下の乳袋を中心に金平蒔絵で蜻蛉、蜘蛛、蜘蛛の巣を表し、蜻蛉、蜘蛛に描割を用いる。蜘蛛の巣は縦糸が弧を描きながら放射状に伸び、横糸は曲線を多用して不規則に表現される。

また胴内部は音越付近まで鑿跡または鉋目が見られ、特に肩から弧極にかけて細かい鉋目が入る。上部の受には墨書ないしは花押が見られる。（渡邊報告書 pp. 112-113 参照）
（野口）





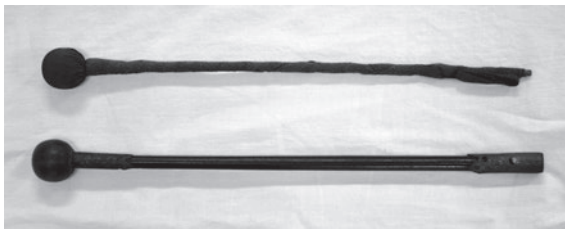
42 黒漆散蓮華文螺鈿時絵磬架

江戸（17～18世紀）

幅48.5 奥行27.3 高50.2

M2481-1（磬架）

仏具の梵音具である磬を吊るす枠に、散蓮華が螺鈿で表され、金蒔絵で細部の線を補う。地塗には粗い梨子地を蒔くものの、後世の補修とみられる。（小池）



ばち 桴

江戸（17世紀末～18世紀初頭）

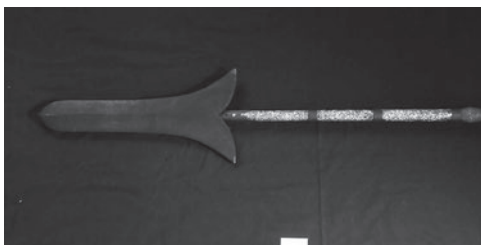
①総長28.5 柄長26.1 柄径0.35
球径2.4

②総長29.7 柄長27.2 柄径0.9
球径3.4

M2481-2

現状で2本がそう。一方は新しい布で覆われ、全容は不明ながら柄の先のみが露出する。直径3.5ミリを測るごく細い柄でこちらが本来の磬架に伴ったと予想される。

もう一方の撞木は手元寄りで径9ミリの柄をつける。全面に黒漆を塗る、細かな断文を多数認め、当初の塗膜の可能性が高い。柄の両端に筒形の金銅製八双金具を装着。いずれも魚々子地に唐草を蹴彫りする。両端の唐草は同様で、同時期のもの。唐草は江戸初期に定型化した葉の形を踏襲するが、やや形が崩れ小ぶりに表されるものは、元禄期前後に作例が多い。（久保）



43 螺鈿槍拵

江戸（18～19世紀）
総長294.5 柄径3.3
M2886-2（槍身）

槍柄首周りにアワビ貝の切貝をタイル状に詰める。鞘は黒漆絞塗り。（小池）

槍 銘 伊賀守金道 (愛知県銃砲刀剣類登録番号 第4232号)

江戸（18～19世紀）
身幅3.2 総長62.2 刃長27.6 茎長31.9
M2886-1（槍刃）

鉄鍛造。両刃で、茎のやや短い槍。目釘孔2個、身幅は広めで鋒と区寄りがわずかに広い。造り込みは薄手で、地には木目の柂目のごとき鍛え肌が明瞭に見える。地刃に微粒子状の沸が厚くつく。刃文は細かに波打つ互の目乱れ。区で焼き落とし風にみせる。茎はやや幅広の角型で、目釘孔の間に「伊賀守金道」と銘を刻む。菊紋は表さない。

伊賀守金道は江戸時代の全時代を通じて襲名した京都の刀工で、西洞院竹屋町に居住したことが『京羽二重』などの地誌に見える。（久保）

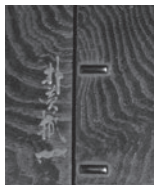
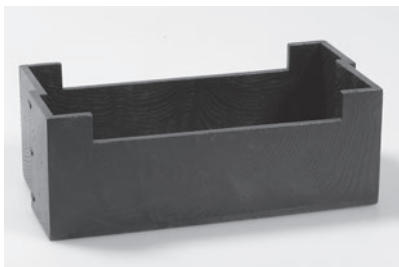
44 黒漆桐紋牡丹唐草文 螺鈿鞍

江戸（17～18世紀）
幅38.0 奥行34.7 高24.0
M1731（青貝螺鈿鞍）

黒漆地にアワビの貝による螺鈿で前輪、後輪の外面に五三桐紋が格子状に配される。居木と前輪・後輪内部には牡丹唐草が表されて、総螺鈿の豪華な作。前輪・後輪ともに低く肉薄の水干鞍と分類される姿で、前輪正面に円文9個を並べた紋が据えられているが、全て剥落している。（カラー口絵 p. 6 参照）（小池）



前輪正面



45 千羽鶴蒔絵染付木具写太平鉢

江戸後期（19世紀） 川本半助（4代）作
身径25.0 高台径12.1 蓋径22.7
取手径10.4 高16.7

M1357（千羽鶴蒔絵染付焼木具写太平鉢）

染付磁器の蓋と身に茶褐色の漆を塗り飛翔する鶴を金蒔絵で描く。鶴の羽根先には銀蒔絵、鶴の頭には朱の点を加える。木製漆塗りを陶磁器胎で写した「木具写し」の代表で、高台内には「山半製」重圈染付書があり、幕末の瀬戸の名工・川本半助（介）（4代・1857没）の作。蒔絵の施工は、おそらく名古屋城下の町方の蒔絵師によるのであろう。陶胎に漆塗りと蒔絵を加えた豊楽焼の大喜豊助も同様の蒔絵を施している。（p. 96 参照）（小池）

46 桑木地田楽箱形煙草盆

江戸（18～19世紀）
幅26.3 奥行13.8 高9.8
M1533（時代桑煙草盆）

豆腐田楽の長方形箱を短辺方向に切り縮めて、角違い状にずらして金属鋸で打ち付けた木地の箱である。単純な長方形の豆腐田楽を並べる箱を少し細身の横長の箱に改造したのは、名古屋の江戸時代中期の町人茶人の草分けである高田太郎庵の好み。身の側面に太郎庵の号である「朴黄狐（花押）」の朱漆書きがある。箱の蓋裏には名古屋の松尾流十代不染斎松尾宗吾の「時代 桑煙草盆 太郎庵在判」と箱書がある。町方の侘び数寄趣味から、粗末な庶民の食器を転用したかのように見えて、桑木地の材はよく吟味された造形である。（小池）

47 木地煙草壺

江戸～明治（18～19世紀）
径7.4 高6.8
M1404（半入莩器）

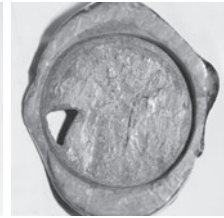
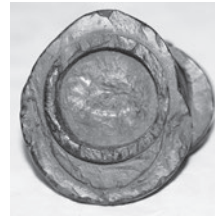
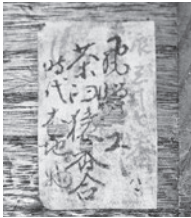
針葉樹の木地を轆轤挽した深い被せ蓋の合子。蓋の中央は山形に張り出す。茶道具の木地師として江戸時代の初期から知られる「半入」の彫銘が底部にある。（小池）



48 もくちようきさるこうごう 木彫猿香合

江戸後期（19世紀）
幅5.5 奥行6.4 高5.5
M2380（木彫猿香合）

針葉樹の木地彫りで猿が臼を引く姿があらわされている。箱の蓋表には「ちゃひき 猿香合」の墨書がある。箱の身側面貼札に「飛騨工 茶臼猿香合 時代木地物」の墨書がある。箱の蓋裏には「大工 平衛門造（花押）」の墨書がある。猿香合の内部には「大工 平衛門（花押）」の朱漆書きがある。身には、同じく朱漆書きの不明花押がある。（小池）



49 はりつさいくとうほくこうごう 破笠細工唐墨香合

江戸後期～明治（19世紀）
径8.5 高2.8
M1507（唐墨香合）

中国・明時代の唐墨を模した姿の香合で蓋の表には道士と怪人、身の底部には「黄帝宮珠」の文字があり、「笠翁製」「（観）方印」が薄肉で添えられている。唐墨の凹凸やひび、傷など本物の古びた墨と見間違える質感を表現している。漆に灰や顔料、土などの下地材を盛り上げてあらわしている。香合の内部は、光沢のある黒漆仕上げである。小川破笠は大名の津軽家に仕えた漆工家で、漆以外の練り物や陶磁器など様々な材料を工夫して蒔絵に施して斬新な作を残した。その技法は、破笠細工として流布、後継者が続いており、破笠自身の確実な作例はわずかである。（小池）





くろうるしきょうとりしゅうるしきょうごう
50 黒漆蝶鳥朱漆絵香合

近代（20世紀）

径6.9 高3.4

M1518（鳥蝶香合）

円筒形台差造りの深い被せ蓋の木製合子容器。総体黒漆塗り、内部は朱漆塗り。肉持ちのある朱漆で蝶、小鳥、枝の小文を散らす。銀箔、蒔絵粉を意図的に磨り落とした痕跡がある。

（小池）



すずじあきくさ むしまきえなつめ
51 錫地秋草に虫蒔絵棗

近代（20世紀）

径6.9 高6.4

M1422（錫地金蒔絵棗 秋草に虫図）

錫合金の密閉性の高い合口の器胎に、秋草に虫が蒔絵で表される。（渡邊報告書 pp. 110-111 参照）（小池）



ためぬりくるみみつあしまるぼん
52 溜塗胡桃三足丸盆

江戸後期～明治（19～20世紀）

径36.3 高5.2

M1390（根来木目クルミ三足丸盆）

鐸の部分を内外朱漆塗り、見込の部分は木目を見せる透漆を用いて春慶塗り風にした木胎挽物の丸盆。底部を黒漆塗り碁笥底にして、本物のクルミの実を三つ付けて脚にしている。

（小池）



しょうぶもんらでんぼん
53 菖蒲文螺鈿盆

近代（19～20世紀）

径46.1 高4.8

M1531（根来青貝入大盆）



54 黒漆松喰鶴盆

江戸後期～明治（19～20世紀）

径36.8 高5.8

M1029（六華蒔絵松喰鶴盆）



55 木地月薄蒔絵盆

近代（20世紀）

幅14.1 奥行13.2 高4.5

M1378（時代 月に薄絵合利型松盆）

松材の木地に薄を金蒔絵であらわし、露を打つ。月は鉛板。一木から削りだした深い四方盆、見込を一段入隅に彫りくぼめる。見込みから口縁および外側面に掛けて蒔絵装飾を平蒔絵で施す。
(小池)



56 透漆塗行利形煙草盆 一組

近代（20世紀）

幅34.0 奥行26.2 高5.3

M1402（舎人形煙草盆）

盆は見込と裏が黒漆塗りで、四辺内外が溜塗。付属品として磁器の徳利と盃、木目込み人形、灰皿箱蓋裏「美濃伊賀灰皿」、同蓋裏「銘 水玉／守一（花押）」（熊谷守一箱書）。包布に「福助に添／李朝／白磁／徳利／盃」。箱表に墨書「福助附属品／白磁／徳利／盃」

灰皿は、元は日常の雑器とみられる水指の蓋。近世初頭の瀬戸ないし美濃の陶器の転用で、発掘品を組み合わせたのであろう。
(小池)



くろうるしつるかめまつきさきもんまきえかこだがたこうろ 57 黒漆鶴亀松笹文蒔絵阿古陀形香炉

近代（19～20世紀）

胴径9.4 高13.6

M2257（阿古陀形嵯峨蒔絵香炉）

木胎黒漆塗り、鶴亀松などの吉祥意匠を粗末な金蒔絵であらわすので「嵯峨蒔絵」の名称を当てたのであろう。嵯峨棗の用語（No. 4解説参照）はあるが特異な造語である。（小池）



くろうるしちやうとんぼなみまきえらでんはこ 58 黒漆蝶蜻蛉波蒔絵螺鈿箱

近代（20世紀）

幅13.0 奥行16.6 高4.5

M1128（青貝蒔絵 蝶・蜻蛉・波図）

木胎黒漆塗り、二段の箱で中に懸子が付く。下段の両側面に紐金具があり、菊折枝型金銅製、脚覆には錦の裂を貼る。蒔絵技法は金の平蒔絵と描割で文様を表す。蝶・蜻蛉の一部にアワビの螺鈿を貼る。蓋裏に朱で文字を書いた形跡があるが判読できない。（小池）



くろうるしつき しなまきえらでんずりばこ 59 黒漆月に鹿蒔絵螺鈿硯箱

近代（20世紀）

幅16.5 奥行18.3 高2.7

M1126（青貝蒔絵 光琳 鹿・月）

総体黒漆塗り、蓋表の中央には鉛板の円窓の中に割貝の螺鈿で鹿をあらわす。角と細部にわずかな金蒔絵を施す。内容品はすべて無く、あるいは色紙箱、書冊箱などを硯箱に転用する意図で収集されたか。（小池）



60 黒漆平台

江戸後期～明治（19世紀）

幅45.5 奥行30.3 高7.1

M643（漆 平台）

総体黒漆塗り長方形の平台で、厨子、仏像の台であろう。長辺に二個、短辺に一個ずつ窓型を開け、緑に彩色した縦格子を埋める。木口、細部に朱漆を塗る。（小池）



61 鳳凰牡丹彫小卓

明治（19～20世紀）

幅50.8 奥行19.5 高6.7

M2325（時代 鎌倉彫小卓）

六脚の低い長方形の卓。木彫漆塗りのいわゆる鎌倉彫の技法により、朱、褐色の漆が古色の煤などを交えて塗りこめられている。脚裏、内部は黒漆塗り。天板には稜花型の枠に二羽の尾長鳥が牡丹の花の上を飛ぶ様が彫りあらわされており、宋・元時代の双鳥様式彫漆の図像を模倣している。枠の外は花菱繋文様で埋め、側面には屈輪唐草文を表す。（小池）



62 黒漆唐草蒔絵机

江戸後期～明治（19～20世紀）

幅87.9 奥行36.0 高27.3

M631（御絵殿蒔絵机）

中国・朝鮮



63 黒漆八宝文螺鈿盆 くろうるしはっぽうもんらでんぼん

元（14世紀）

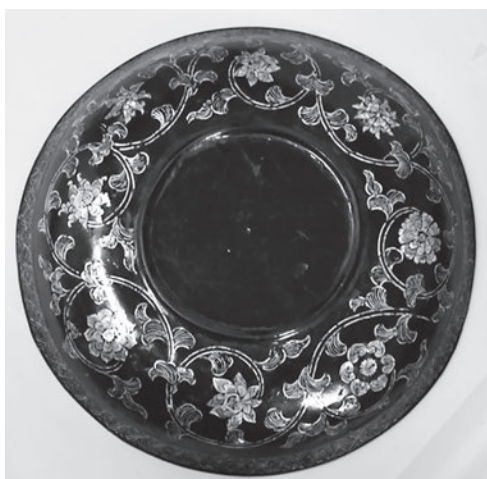
径20.8 高2.5

M1386（唐物青貝丸盆）

広い鐳に反りをつけた総体黒漆塗りの螺鈿丸盆。口縁・高台共に玉縁であり、高台内の黒漆は他の箇所と色が異なる。高台が小さく特徴的である。見込と口縁に鏤線を巡らし、鏤線部分に緑青が見られるため、銅製だと思われる。

見込には、丸文を中心に八稜形を表し、各弁内に双魚・壺・蓮など、八つの吉祥文を置く。花卉の外側には空間を埋めるように菊唐草を八箇所配置する。

鐳の表裏には花唐草を表し、花は各々異なる表現である。蔓も古様の二重蔓を巡らす。鐳の外側縁に七宝繫文の帯と帯上下の金属鏤線を界線に用いる。（カラー口絵 p. 7 および渡邊報告書 pp. 99-101 参照）
（大多和）



裏面



鐔内側の唐草拡大図

花には細かく線彫りが施されており、唐草は細く切り取った螺鈿で葉脈なども表している。



見込内の八稜弁内の一つ

見込みに表す八稜花の各弁に表される吉祥文のうちの一つ。



口縁部分拡大図

螺鈿で表される七宝繫文のうち途切れている部分。七宝繫文の上下に縹線を巡らす。



側面

側面写真。鐔に表す花唐草は、見込側に10、外側に8つの花を配す。そのため、外側はよりゆったりとした草の動きが見える。



64 黒漆花鳥人物図螺鈿棚

明～清（16～17世紀）

幅29.6 奥行26.7 高59.4

M2622（青貝脇台）

花鳥や中国人物などを各面に螺鈿であらわす。剥ぎ出し技法による中国螺鈿で、日本の茶の湯棚にも恰好な形状である。注文によるかあるいは、各パネルを再構成した可能性がある。

（小池）



65 黒漆樹下人物図螺鈿卓

明（16～17世紀）

幅33.8 奥行33.8 高45.8

M1733（明代青貝年輪花中央卓）

剥ぎ出し技法による中国螺鈿。四脚の背の高い姿は、中央卓と呼ばれ中世日本の禅院では、文字通り居室・僧堂の中央に飾り香炉台に用いたが、やがて床の間の建築様式が定着すると床の間内部で壁面に近く置かれ使用された。

（小池）



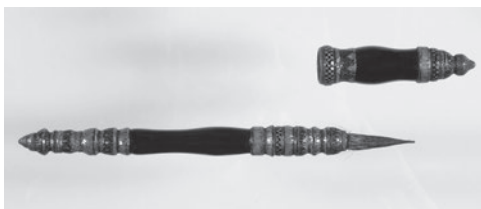
66 黒漆楼閣人物図螺鈿卓

明（16～17世紀）

幅30.5 奥行30.5 高47.3

M1732（青貝螺鈿卓）

剥ぎ出し技法による中国螺鈿。 （小池）



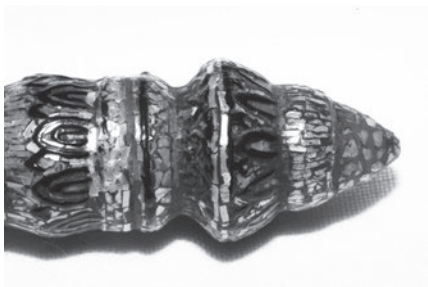
67 黒漆鋸歯石畳文螺鈿筆 鞘付

明～清（16～17世紀）

径2.2 総長25.1

M1598（唐物青貝筆）

剥ぎ出し技法による中国螺鈿。微細な貝片を使用する。鞘、軸の中央部無文の黒漆塗り部分は後補か。 （小池）





68 黒漆椿捻文螺鈿香合

くろうるしつばきねじもんらんでんこうごう
明～清 (16～17世紀)

径7.1 総高4.0

M1505 (唐物青物香合

銘 市女笠)

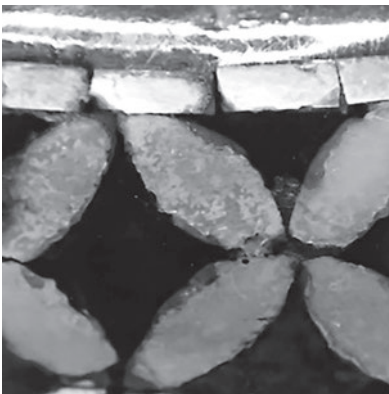
総体黒漆塗り合口蓋造りの丸形香合。蓋身に螺鈿と金属繕線を施す。桐箱蓋裏には「青貝香合 市女笠(守一・花押)」とあり、熊谷守一(1880-1977)が墨書を書いている。

蓋は中央から口縁にかけて捻文の金属繕線を4本等間隔に巡らし、合口部分にも金属繕線を廻す。繕線によって分けられた区画には螺鈿で折枝椿文と花菱繁文が対で表現されている。身は低い立上りを持ち、蓋と同様に合口部分に金属繕線を廻す。側面には螺鈿で帯状に七宝繁文を表している。

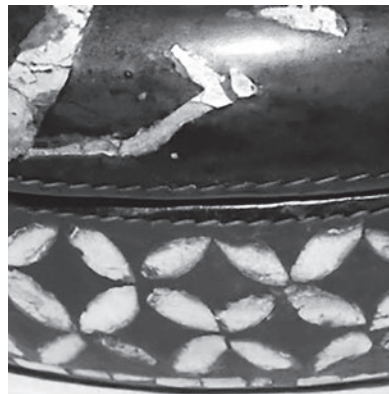
螺鈿の隅には漆が被る箇所があることから、漆を塗り込んだ後に貝表面の漆を刃物等で剥いで出す、剥ぎ出し技法で文様を出している。(カラー口絵 p. 8 および渡邊報告書 pp. 104-105 参照) (小菅)



外箱蓋裏 墨書



身側面 七宝繁文



合口部分 繕線



69 黒漆鈴虫図螺鈿香合

明～清（16～17世紀）

最大径6.7 底径4.5 高2.2

M1495（唐物青貝鈴虫香合）

金属綫線を蓋の天部と外周および身の口縁外周にめぐらす。鈴虫の羽根にほどこされた、線と点による微細な毛彫りが巧みである。肩の周囲部分の漆の色が大きく違うのは拙い後世の修復による。螺鈿の装着は、研ぎ出ししか、剥ぎ出ししか、後世の修復が甚だしく、判然としない。古い中国螺鈿の部材を日本で改造した可能性がある。（カラー口絵 p. 8 参照）（小池）



70 黒漆楼閣人物図螺鈿四方盆

明（16～17世紀）

幅19.8 奥行19.8 高2.3

M1385（唐物青貝楼閣人物文四方盆）

剥ぎ出し技法による中国螺鈿。我が国の茶の湯では、菓子盆、茶入れ盆に用いる。（小池）



くろうるしろうかくじんびつずらでんじくぼん
71 黒漆楼閣人物図螺鈿軸盆

明（16～17世紀）

幅13.7 奥行18.7 高2.4

M1028（螺鈿長角盆）

剥ぎ出し技法による中国螺鈿。図様は楼閣騎馬人物、科挙に合格した状元及第図などの立身出世の吉祥図を基にしている。（小池）



どうせいたんぞうどら
72 銅製鍛造銅鑼

江戸（18～19世紀）

胴径58.0 口径38.2 撞座径15.3 撞座高2.7 厚さ16.3

M640-1（銅鑼）

銅鍛造。鼓面の中央に撞座を高く作り出す大型の銅鑼。鼓面は緩やかに膨らみ、中央に向かって平坦となる。撞座も鼓面は緩やかに膨らむものの、中央は平坦に作る。胴は口へ向かって強くすばまる。全体に錠目を密に表すが、挽き回した痕跡はない。地金の古色は茶色を呈するが、わずかに黄味を帯びる個所があり、砂張質に近い。表面に黒漆を焼き付ける。（久保）

くろうるしほうおうからこもんらでんどうわく
黒漆鳳凰唐子文螺鈿銅鑼杵

明（16～17世紀）

幅78.8 奥行23.1 総高84.4

M640-2

銅鑼の杵は、総体が黒漆塗り剥ぎ出し螺鈿。杵の裏表の天棒には鳳凰と唐草、縦棒には唐子と唐草、底部幕板には玉取唐獅子をあらわし左右の基台には丁子、笠、卷子など吉祥文をあらわす。（小池）



しゅうるしきぼりしょうじゅおながどりずばち
朱漆木彫松樹尾長鳥図桴

近代（19～20世紀）

最大径9.4 全長42.9

M640-3

桴は木彫朱漆塗り。

（小池）



73 黒漆蓮池鴛鴦図螺鈿卓

明（16～17世紀）

幅47 奥行37 高54.2

M622（柳樹鴛鴦香炉卓〔青貝入唐物〕）

総体黒漆塗り、剥ぎ出し技法の中国螺鈿。天板表には水辺に柳、蓮花、一對の鴛鴦図、地板の表には花樹小禽図。4本の猫足には花唐草文をめぐらす。（小池）



天板



地板



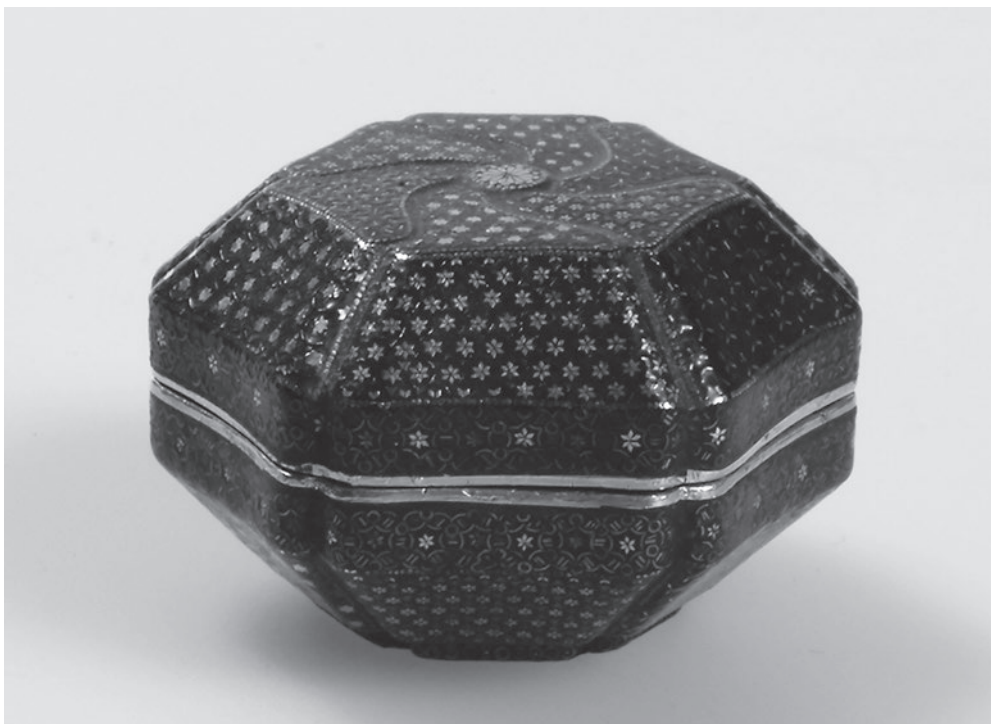
74 黒漆樹下人物図螺鈿三脚卓

清（17～18世紀）

径34.8 高19.8

M1439（唐物青貝三つ足卓）

総体黒漆塗り、剥ぎ出し技法の中国螺鈿。円形、湾曲した三脚をつける。天板表には、松樹下人物図。（小池）



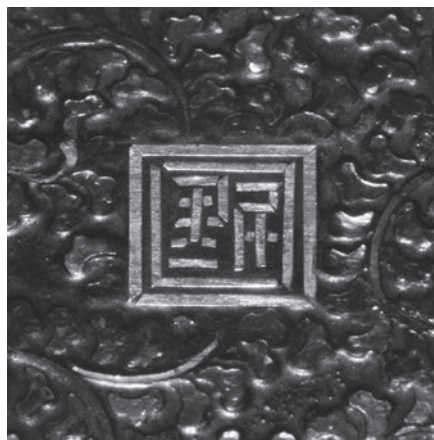
くろうるしろつかくらでんねじばなもんこうす
75 黒漆六角螺鈿捻花文台子

清（18～19世紀）

径5 高3.2

M1500-3（乾隆ソマダ 六角香合）

六角形で肩と腰の部分を斜めに削いで、捻花型の姿である。微細な螺鈿と金と銀の薄板を密に詰めて文様をあらわし、黒漆で塗りこめてから研ぎ出す技法は、江千里が得意とした技法で、本作にも高台内部に金の薄板で「千里」角印の銘がある。高台と蓋・身の口縁に金の薄板で覆輪が施されており、同種の江千里の様式で製作された本コレクションの3点のなかでは、最も精緻で豪華な作である。（小池）





くろうるしらでんかもんごうす
76 黒漆螺鈿花文合子

清 (18~19世紀)

径3.9 高4.5

M1500-2 (乾隆ソマダ 松笠香合)

小粒の球形合子。木胎黒漆に研ぎ出しによる微細な螺鈿と金薄板をタイル状に詰めて花菱の小文を格子状に埋めつくす。蓋の中央には金の薄板で菊花をあらわす。明時代末-清時代のこの種の技法で名人とされた江千里を示す銘である「千里」四方角印の螺鈿銘が、身の底部にある。
(小池)



くろうるしらつかくらでんねじばなもんさら
77 黒漆六角螺鈿捻花文皿

清 (18~19世紀)

径12.4 高1.6

M1500-1 (乾隆ソマダ 葵盆)

黒漆塗りで、金属胎。薄い器胎を六弁の葵花形に捻り、銀とみられる覆輪を施す。螺鈿と金と銀の薄板をタイル状に詰めて研ぎだしている。煎茶の瓶敷に永らく使用したためか、汚れと熱により汚損がはなはだしい。箱書 (p. 97 参照)によると大正期の画家田近竹邨の遺愛品。
(小池)



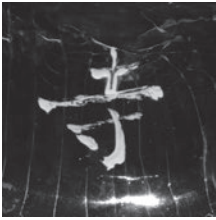
78 屈輪文堆黒天目台

元（14世紀）

鍔径16 底径8 高7.9

M772（唐物 屈輪天目台）

メガネ型の屈輪文様を施した堆黒の天目台。黒漆の積層は厚く、中間に朱漆の薄い層が2層含まれている。光沢ある良質な漆が用いられており、最も彫り込んだ底の谷部分に黄色の層がある。土居（脚）の円筒形内部に朱漆で「金剛寺」と大きく文字がある。同名の寺院は少なくないが「女人高野」として知られる真言宗御室派大本山天野山・金剛寺（大阪府）の什物であったのであろう。中世には唐物天目台は多数が輸入されて、寺院の応接道具として使用された。複数寺院や塔頭が諸道具を持ち寄り、応接・饗宴に使用したので所有者の名前を文字や記号で施した伝世品が多い。（カラー口絵 p. 8 参照）（小池）





79 ばいかずついでしきこうごう 梅花図堆朱香合

明～清（16～17世紀）

径7.2 高4.3

M1510（堆朱梅花両面香合）

紡錘形の両面彫りの堆朱香合。地文様には青海波に似た水流文を埋め尽くしている。（小池）



80 れいしきずついでしきこうごう 荔枝図堆朱香合

清（17世紀）

径6.7 高3.4

M1509（乾隆堆朱両面香合）

扁平な円筒形、寸切り型の両面彫りの堆朱香合。蓋と身の両方に枝に実る荔枝の果実をあらわす。この種の堆朱香合は、数多く模倣擬似作が長期にわたり製作されたとみられる。本作も地文様には花菱繋がすべての地を埋めており、地文様、荔枝の上文様ともに類形化がみられ、彫り込んだ部分に古色の黒い染料を加えている。（小池）



くろきりしごりんかがたぼん 81 黒漆五輪花形盆

宋（12～13世紀）

径27 高3.2

M1591（唐物黒無地輪花盆）

五輪花型、黒漆塗り無紋漆器の盆。底部は碁笥底で鐫の部分は内外に五筋の稜線がある。この姿は、唐時代頃の銀器を模しており、薄い金属製の板を鍛造した鋭利な姿を漆器で表現している。宋時代以降の漆器生産拡大や手工業の発達を受けて、このような無紋漆器の生産が高まり、中国国内だけでなく、中世の日本にその後も輸入されたとみられる。製作当初は、光沢のある平滑な塗膜であったのだろうが、経年の劣化と使用による損耗、さらに何度も塗り替えて使用されてきた痕跡も発掘品には無い魅力がある。（カラー口絵 p. 9 参照）

（小池）



全景 表面

82 もくめさきぼん 木目塗盆

元～明（14～15世紀）

口縁径25.5 高台径18.7 高2.6

M1590（唐物存生木目塗菓子盆）

見込みから口縁にかけて湾曲した鍔を持つ木胎丸形盆。口縁は黄色の金属覆輪を付ける。桐箱蓋表に「唐物存生盆」の墨書がある。表の見込みから鍔表、鍔裏にかけて黒・朱・白・緑の複雑な木目状の塗り、裏の基筒底内は朱塗り。基筒底以外の鍔の表裏、見込み全体に黄褐色の透明な塗膜に覆われている。

現在見られる一般的な木目塗とは異なった複雑な文様表現が本作にはおこなわれており、他に類例のないものである。（カラー口絵 p. 9、岡田論文 pp. 27-35 および渡邊報告書 pp. 114-117 参照）（小菅）

参考文献：五島美術館[編]『存星：漆芸の彩り』五島美術館－2014



全景 裏面



覆輪部分



側面



83 独楽塗合子

明～清（16～17世紀）
径6.0 底径5.0 高6.6
M1581（唐物独楽茶器）

朱・緑・黄などの色を同心円状にほどこした蓋物容器、皿などをわが国ではおもちゃの独楽（コマ）になぞらえて独楽塗りと呼ぶ。茶の湯の世界では、とりわけ尊重して薄茶器、煙草壺、菓子盆などに用いた。中国南部・東南アジア製作といわれ、また日本製の模作も多い。本作は、内部は木地のままの粗い轆轤目を見せており、表の彩色と合わせて鑑賞の対象でもある。黄色と緑の塗膜には、溶けきれない顔料の黄色の鉱物質の微粉末が見える。木地と塗料の特徴から日本製の模倣作とは見えず、東南アジアの可能性は否定しきれないものの甲盛りのある蓋、少し裾すぼまりの姿、正確な合口造りの観点から中国製と捉えておく。（小池）



84 朱漆楼閣人物図食籠

明（16～17世紀）
径27.0 底径20.8 高16.3
M1482（朱地金彩楼閣高士図食籠）

七角形の蓋物容器。総体朱漆塗りに、箔絵で蓋の表に楼閣人物図をあらわす。官人2人、従者2人の姿を明瞭に描く。蓋の肩、身の腰部分には牡丹唐草をめぐらし、蓋身の蔓には麻の葉繫文様で埋める。高台の周囲は雷紋繫。内部、底部は黒漆塗り。（小池）



85 内朱外黒漆籠地貼盆

清（17世紀）
幅12.4 奥行12.2 高3.1
附属：釜敷
M1565（唐物内朱四方瓶台）

正方形入隅の浅い盆。四側面の外に籠網地を窓枠型内に貼る。枠部分は、黒漆塗り。内部は新しい朱漆塗りで、複数段の重箱や箱物を改造した可能性がある。（小池）



86 葡萄空花台 ぶどうもくかだい

清 (18~19世紀)

幅61.8 奥行43.5 高22.3

M637 (唐物花台 舞葡萄)

木瓜型四稜の天板に黒漆塗りの枠と四足をつけ、床脚式に各足には畳すりをめぐらせる。天板の木地板には、複雑な木理をみせる葡萄空と呼ばれる球形が連続する木目が鮮やかである。簡単な球形木目は玉空、複雑な場合は舞葡萄空などと呼ばれて珍重される。(小池)



87 木地丸脚附卓 きじまるあしつきじよく

清 (19世紀)

幅62.0 奥行15.2 総高44.4

M1734 (唐桑丸卓)

木地に薄く漆をかけている。柱二本の卓で、側面に湾曲した腕を付ける。基部に佐川田昌俊とする朱添書・花押がある (p. 97 参照)。

(小池)



88 斑竹寄木長角盆

清（19～20世紀）

幅31.8 奥行20.7 高3.2

M1532（唐物斑竹寄木長角香盆）

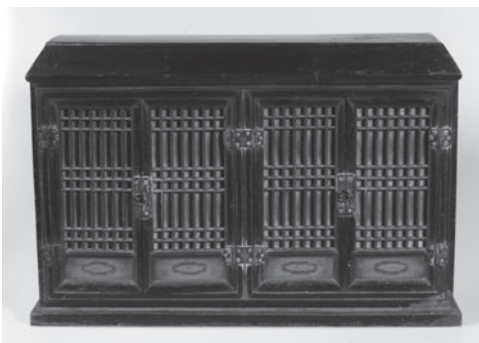


89 集木輪花式茶銚盆

清（20世紀）

径12.2 底径10.9 高2.9

M1400（唐物寄木瓶敷〔集木輪花敷茶銚盆〕）



90 黒漆厨子

朝鮮（19～20世紀）
幅70.6 奥行22.7 高47.2
M2927（厨子）

観音開きの扉二組一対、内部は朱漆塗り、扉は格子に紙貼りをし、下部腰部分は朱漆塗り。側背面も朱漆塗り。近代における改造、塗り直しが甚だしい。（小池）



金具は真鍮製。入隅の方形の蝶番金具を隅につける。金具の形状と釘の頭の無造作なつくりから見て、いずれも本体と同様に朝鮮時代のものであると思われる。ただし、扉中央につく鑲と鑲台は日本で取り付けられた可能性も考えられる。朝鮮家具の金具の多くは真鍮の金色を装飾の一部として見せることが多い。扉の腰羽目板の木瓜形の彫り込みなども朝鮮家具に時折みられる。また、底に太い梁をさし渡すのも、朝鮮や中国の家具調度に一般的に行われた手法である。（久保）



91 黒漆草花文螺鈿机

朝鮮（19～20世紀）
横122.0 縦51.4 高40.9
M634（蒔絵机）

同形の机は中国製にもあり、本作は脚部分に改造の痕跡がある。背の高い机を日本人の座る生活に合わせて改造を加えた可能性がある。（小池）



92 黒漆蘭散文螺鈿筆筒

朝鮮（19～20世紀）
幅118.8 奥行43.3 高52.9
M623（刀筆筒）

橋本独山旧蔵。

東南アジア・その他



93 独楽宝珠香合

中国・東南アジア（19～20世紀）

径6.3 高5.3

M1517（独楽宝珠香合）

轆轤挽きした木地に黒漆を塗った宝珠型香合である。蓋側面及び上部に八本の挽き溝があり、上部溝には朱、黄、深緑の色漆にて溝に沿って着色されている。内側には、深い挽き痕があり、制作当時の轆轤の回転と刃物の勢いが見てとれる。銘はなく、正確な制作年代や地域は不明であるが、香合として茶人らに珍重されてきたものと思われる。（カラー口絵 p. 10 参照）（松島）



蓋裏



身の内部



94 きんまはなもんこうす 蒟醬花文合子

タイ・ミャンマー（19～20世紀）

径5.3 高4.4

M1594（金馬十画莫宮）

藍胎素地に黒漆が塗られており、幾何学文様の線が朱漆の蒟醬技法で施されている合子である。蓋上面には十角の枠に六弁の花文様、側面には幾何学文様、底面には籠目文様を配す。蒟醬とは、黒・朱などの漆を塗った面に、刃物で細かな彫りを施し、色漆や顔料をその彫りの中に埋め込み、研いで文様を表す技法で、中国では填漆、ミャンマーではカニツ（kanyit）、タイではライクツ（lai khut）という。東南アジアでは、現在でもキンマ（コショウ科の蔓性植物の葉に檳榔樹の種子や石灰などを包んで噛む嗜好品）を噛む習慣がある。ミャンマーにはキンマの材料を入れ、携帯時や客人をもてなす時に使用する被蓋付き円筒型の入れ物があり、コンイツ（kun it）という。一段ないし2段の懸子のあるものが多い。16～17世紀に東南アジアとの交易でもたらされたキンマをいれる器にこの技法が施されていたことから、この技法を蒟醬と呼ぶようになったと言われている。（カラー口絵 p. 10 参照）（松島）



身側面



くろうるしがつとうがたくもつき
95 黒漆仏塔形供物器

ミャンマー（20世紀）

径55.2 高46.4

M2382（ビルマ 藍胎漆蓋物（外黒・内赤））

蓋、中央、身と3部に分かれている仏塔型足つき供物器である。蓋の上部の尖った部分は木製、その他は藍胎で、外側は黒漆、内側は朱漆が塗られている。同様の供物器は現在でもミャンマーで使用されており、供物を入れて寺院へ運び、蓋と身を分解して使用する。ミャンマーではダウンバウン（daung-baung）と呼ばれ、主にミャンマー北部のザガイン管区モンユア近郊にあるチャウッカ村で制作されている。チャウッカ村の漆器は装飾が少なく、一般家庭で使用する黒漆塗りの供物器が多く生産されている。

（松島）



しゅうるしらんたいくもつき
96 朱漆藍胎供物器

ミャンマー（20世紀）

口径50.0 底径45.5 高31.8

M2383（ビルマ 藍胎朱漆台付大盆）

ミャンマーの藍胎朱漆塗りの高坏型供物器である。器部を轆轤挽きした木棒複数本で支えている。ミャンマーではカラッ（kalat）と呼ばれ、現在でも寺院へ供物を奉納する際や、家庭の仏壇に供物を供えるのに使用されている。同種の供物器がミャンマー北東部シャン州のインレー湖やレイチャー、モネ等の地域で制作されており、当地の少数民族の人々が日常的に使用している漆器である。

（松島）



くろうるしおもんぶつとうがたくもつき 97 黒漆花文仏塔形供物器

ミャンマー（19世紀末～20世紀）

径47.5 高77.0

M2384（ビルマ 仏塔形籃胎台付文様蓋物）

ミャンマーの木製黒漆塗りの仏塔型供物器である。ミャンマーではスンオーク（hsun-ok）と呼ばれ現在でも使用されている。木材を轆轤で回転させ削り加工されてある。ミャンマーでは漆器に使用される素地材は竹が多く、節間の長い種の竹を切断し、薄く割いたり籤に加工したものを編む・捲くなどして成形する。木材料はチークや軟質の木材が使用されるが、竹に比べると高価なため、このような大型の轆轤加工による木胎漆器は希少である。表側は黒漆、内側は朱漆が施され、側面の周囲には、パンシュエ（pan-shwe）と呼ばれる花をモチーフとした連続文様が、朱の蒔絵で描かれている。上部器を轆轤挽きした木棒複数本の足で支えている。ミャンマー漆器には制作年・製作者名が蒔絵で記載されることがあるが当品にはない。シンプルな作風と類似作品例から、ミャンマー北部のザガイン管区モンユア近郊にあるチャウッカ村で作られたと考えられる。（カラー口絵 p. 11 参照）（松島）



しゅううるしおもんぶつとうがたくもつき 98 朱漆仏塔形供物器

ミャンマー（20世紀）

最大径10.5 底径9.8 高21.8

M2388（ビルマ 仏塔形朱漆合子）

ミャンマーの小型の木製朱漆塗りの仏塔型供物器のスンオーク（hsun-ok）である。足部分のみ黒漆が施されている。木材を轆轤で回転させ仏塔型に削り加工されたものである。シャン州のレイチャーという地域で制作された類似例があることから、シャン州で制作された可能性が高い。このような小型の供物台には、ハゼ米やお守りを入れるなどの用途で使用されたと推測される。（松島）



99 しゅうしほん 朱漆盆

東南アジア (20世紀)

径39.3 高7.4

M2861 (シャム 朱塗盆)

木製朱漆塗りの盆である。肉厚で安定感のある高台、このような朱漆塗木製盆は広く中国や東南アジアで使用されている。制作年代や場所、制作者に関する銘はないが、箱の紙の蓋覆には木村定三氏の筆によりシャムと記されており、タイからもたらされた可能性がある。(松島)



100 しゅうしよんそくほん 朱漆四足盆

東南アジア (20世紀)

径36.1 高6.3

M2862 (シャム 朱塗足付盆)

木製朱漆塗りの盆である。底面中央には轆轤で成形した時に固定する爪痕が4箇所ある。また直径15ミリ程の円柱型の短い足が4箇所ついている。足つきの漆器は、タイやミャンマーでしばしば見かけるが、制作年代や場所、制作者に関する銘はないが、箱の紙の蓋覆には木村定三氏の筆によりシャムと記されており、タイからもたらされた可能性がある。(松島)



101 きんまとりもんほちりょうかがたほん 蒔罽鳥文八稜花形盆

中国・東南アジア (18~19世紀)

径33.6 高4.0

M1391 (金馬輪花花鳥盆)

蒔罽技法による八稜花形盆である。花卉の内側に布目を活かした金箔貼りの花卉型窓抜があり、中央は黒漆地に大振りの草花と鳥が朱漆を使った蒔罽で描かれている。蒔罽のほか、花卉内側や裏側に朱漆にて線描表現されてある部分もあり、蒔罽と線描の混合表現となっている。蒔罽による花鳥文様はタイの漆器の特徴が顕著であるが、一部布目を見せた稜花形漆器は東南アジアではほとんど前例がなく、中国明・清代に螺鈿や存星が施された盆があることから、素地が作られた地から旅をして蒔罽の彩色が施されたのではないかと推測する。(松島)

凡 例

- ・本目録は、愛知県美術館所蔵「木村定三コレクション」の中から、漆工芸品とその付属品の一部を掲載し、解説を付したものである。
- ・各作品名は、各作品の調査者の見解を勘案して決定した。
- ・各作品のデータは、掲載番号、作品名、製作年代、寸法（cm）、コレクション番号、受入時名称の順に記載した。
- ・掲載の順は、日本、中国・朝鮮半島、東南アジアと製作地に分け、用途別とした。ただし日本においては近代以降の作品は末尾にまとめた。
- ・本目録は、下記の調査者が分担執筆し、各文末に下記の略称に従って記した。

鶴見大学教授	小池富雄（小池）
宇都宮大学教授	松島さくら子（松島）
京都国立博物館名誉研究員	久保智康（久保）
鶴見大学大学院文学研究科文化財学専攻博士後期課程	小菅太一（小菅）
	大多和弥生（大多和）
鶴見大学文学部文化財学科学学生	野口明日香（野口）

なお、鶴見大学文学部文化財学科において科学分析を担当したのは、助手・神山晶子、同・山田真穂、大学院生・西下正純、渡邊裕香および上記の小菅、大多和、野口の計7名である。
- ・一連の漆工調査は2006年（平成19年）より始まり、愛知県美術館学芸員、古田浩俊、鯨井秀伸、長屋葉津子、副田一穂が引き継ぎを行いながら担当した。上記調査者以外にも、土井久美子氏（大阪市立美術館）、小川幹生氏（名古屋市博物館）、西岡康宏氏（東京国立博物館 退職）、北村昭斎氏、北村繁氏（調査順）の助言、協力を得、また池田素子、加藤里英、村瀬可奈の調査補助を受けた。

編集 愛知県美術館 副田一穂